

# Spiritualism News Letter

2000  
第11号

10月1日発行

スピリチュアリズム・ニュースレター

発行/スピリチュアリズム・サークル 心の道場

発行人/小池里予

〒441-3141 愛知県豊橋市大岩町字北山468-1

TEL 0532-41-0537 FAX 0532-41-8257

ホームページアドレス <http://www5a.biglobe.ne.jp/~spk/>

今号の内容

- ・これまで日本には何故、正しいスピリチュアリズムが存在しなかったのか  
スピリチュアリズムの基本プロセス 真理・信仰・実践..... 1
- ・スピリチュアリズムから見たエドガー・ケイシー.....13
- ・釈迦(シャカ)は今?.....26

## これまで日本には何故、正しいスピリチュアリズムが存在しなかったのか

スピリチュアリズムの基本プロセス 真理・信仰・実践

スピリチュアリズムにおける最も基本的なプロセスとは

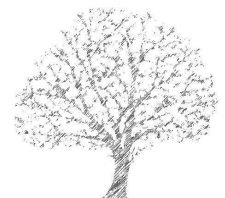
スピリチュアリズムが霊界の高級霊によって興されたプロジェクトであることは今さら言うまでもありませんが、その高級霊による計画の目的は、地上人類を救うために「霊的真理」を地上にもたらすというものです。これこそが、スピリチュアリズムの最も本質的な点なのです。スピリチュアリストとは、そうした高級霊の働きかけによって地上において真っ先に霊的真理と出会った人間、真理を受け入れ、他の人々に先駆けて霊的恩恵にあずかった人間ということになります。

スピリチュアリズムによって地上世界にもたらされた「霊的真理」は、どこまでも霊性を進化させるための手引きであり、霊的実践のためのガイドです。霊界の高級霊が、これまで地上人が全く知ることのなかった霊的真理を示したのは、単に目新しい知識や情報を与えるためではありません。地上人の霊性を高め、魂を救うために与えたのです。霊的真理を実行することによって「霊的成長」をなし、死後に苦しみや後悔を残さないように与えたのです。

このことを、真理を受ける私達地上人の立場か

ら考えてみるならば、以下のような一連の流れの中で進展していくことになります。まず霊的真理と出会うこと、次にそれを正しく理解すること(真理の正確な理解)、そしてそれを絶対的に信頼し人生の指針・生活の方針とすること(真理への絶対信頼・絶対信仰)、さらにそれを実生活の中で実行すること、その結果として霊的向上をなし魂の救いを得るということです。別の言い方をすれば、スピリチュアリストの歩みとは、真理 真理に基づく信仰 真理の実践 魂の成長という一連の霊的成長のためのプロセスであるということになります。この全てのプロセスこそが、スピリチュアリズムに他なりません。

このスピリチュアリズムの基本的なプロセス・流れをしっかりと押さえておかないと、多くの知識を得れば得るほど、全体の流れを見失い、肝心な点がどこかに飛んでいってしまいます。自分なりの勝手なスピリチュアリズムの解釈をすることになります。



読むには読んだが、内容を理解していない現状  
靈的真理の正しい理解が、スピリチュアリズム  
の出発点であることは言うまでもありません。靈  
的真理の正確な理解なくして、スピリチュアリズム  
の道を正しく歩むことはできません。無駄な努力  
、無意味で的外れな努力をすることにもなりかね  
ません。『シルバーバーチの靈訓』やモーゼスの  
『靈訓』、その他のスピリチュアリズム関係の本  
を読むことで、スピリチュアリストになったかの  
ように勘違いしている方々がいらっしゃいます。

本を読むことの目的は、そこに書かれている内容  
を正しく理解するところにあります。しかるに、こ  
の内容を正しく理解するという当たり前のことが  
、現在のスピリチュアリズムにおいては、まだ十  
分に行われていないのです。実際、シルバーバー  
チの靈訓を10年以上にわたって愛読していなが  
ら、その内容を間違えて理解している方々が見受  
けられます。シルバーバーチの靈訓を始め、すべ  
てのスピリチュアリズム関連の書物を持っている  
にもかかわらず、それを正しく理解している方は  
、率直に言って本当にわずかしかないのです。

それには理由があります。『シルバーバーチの靈  
訓』一つをとっても、現在、日本では20冊近くの  
本が出版されています。それらを一通り読むだけ  
で大変な時間がかかります。さらに、それらの内容  
をまとめ全体のポイントを正確に把握するには、多  
くの時間が必要とされます。2、3度読んだだけで  
、シルバーバーチの全体像を適確にとらえること  
はできません。何十回と繰り返し読まない限り、  
全体の内容を正確に理解することは不可能な  
のです。全体像を正しく理解しポイントを要約  
(サマライズ)することは、それほどまでに時間  
のかかることなのです。

しかし、そうした作業をへない限り、いつまでた  
ってもシルバーバーチを正確に理解することは  
できません。たとえシルバーバーチを片っ端から  
読破しても、それだけでは駄目なのです。まして  
その後、次々と別の本へと進んでいくなれば、  
シルバーバーチの内容は流され、後には、ほんの  
わずかな印象しか残らないこととなります。こ  
れが大半の人々の実情です。シルバーバーチを  
読むには読んだが、その

内容を理解していないのです。確かにシルバーバー  
チを読んだのですが、結局、何も残っていないの  
です。

あれこれと多くの靈界通信やスピリチュアリズム  
関係の書物を読み漁る人に限って、シルバーバー  
チも他の宗教の教えも同じであるとか、どちら  
も良いことを言っているといった程度の理解  
しかしていません。本当に分かってみれば、  
スピリチュアリズムほど靈界の事実を明らか  
にしているものは他にないのですが、その違  
いが分からないのです。スピリチュアリズム  
ほど正確でスケールの大きな知識の体系は、  
地上世界には存在しません。

現在の日本のスピリチュアリズムにおける問題  
点の一つは、真っ先にスピリチュアリズムと  
出会った人々が、靈的真理の内容とその価値  
を正しく理解していないということなのです。

#### 身勝手な真理の理解をする人々

人間は誰でも自分の好みを通して本の内容を理  
解しようとします。自分に心地よいものだけ  
を取り入れようとします。自分の好みや考  
えと一致しているものは正しく、自分の考  
えと合わないものは間違っていると決め  
つけようとします。こうした傾向は、靈  
訓を読む際にも現れます。『シルバーバー  
チの靈訓』に対して、その中にある自分  
の好みと一致しているものだけを選び取  
り、そうでないものは流して読み進める  
こととなります。シルバーバーチが語る  
優しい言葉、慰めとなる言葉、愛につ  
いての言葉だけが心に残り、厳しい内  
容や心に痛い箇所は読み飛ばし忘れて  
しまいます。それは丁度、占い師に将来  
の運命を観てもらったとき、良いこと  
だけを信じ、悪いことは信じないよう  
にするのと同じです。これと同様の感  
覚で、シルバーバーチを読んでいる方  
が多いのです。自己に甘いクリスチャン  
が、イエス様は優しく罪を許してくだ  
さると勝手に都合の良いイメージを作  
り上げるのと同じような傾向が、スピ  
リチュアリズムにおいても見られるの  
です。

心地よさや優しさ、慰めを求めるのは人間  
としての自然な姿ですが、そうした甘さ  
だけを「靈的真理」に求めるとする  
ならば、いつまでたっても真理を正

しく理解することはできません。靈的成長の道を歩むことはできません。シルバーバーチを10年以上も愛読しながら、依然として自分なりの世界を一步も脱け出せない人がいます。「スピリチュアリズムだけが優れているかのように言うのは教条的で偏狭である」と言う人に限って、何一つ靈的真理の本質を理解していないのです。真理の正確な理解は、ムードによってなされるものではなく、理性を最大限にまで厳しく用いて初めて可能となるのです。

スピリチュアリズムの最大の敵は、外部ではなく内部にいる。つまり、生半可な知識で全てを悟ったつもりでいる人たちが、往々にして最大の障害となっているように見受けられます。

新たなる啓示・46

#### 靈的真理のアウトラインを正しくとらえる

このニューズレターの目的は、『シルバーバーチの靈訓』やモーゼスの『靈訓』を始めとするスピリチュアリズムの教えが、地上世界において最も素晴らしいものであることを皆さんに再認識していただくことにあります。ニューズレターは、スピリチュアリズムがいかに優れたものであるかを宣伝するために発行しているのです。皆さんがすでに手にしておられる「靈訓」が、どれほど素晴らしいものであるかを改めて知っていただき、それを、これからの人生における“最高の指針”にしてくださることを願っています。これまで実際に、このニューズレターによって靈訓の価値を再認識し、靈訓を人生の最高の指針と定め、新たな靈的人生を歩み始めた多くの方々がいらっしゃいます。

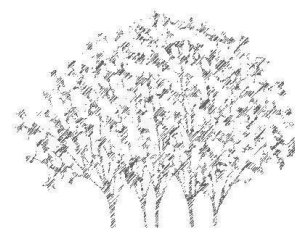
当サークルでは、『スピリチュアリズム入門』『続スピリチュアリズム入門』を出版していますが、これらは膨大な量に及ぶスピリチュアリズム関係の知識を体系的に理解できるようにまとめたものです。スピリチュアリズムのアウトラインを正しく理解していただくことを意図しています。アウトラインをしっかりと押さえてから「靈訓」へと読み進めていく

なら、その内容を偏りなく理解していただけるものと思います。

#### 日常の実践を通じて深められる靈的真理への理解

靈的真理は、何度も繰り返し読むことで、徐々に全体像が理解できるようになっていきます。またその一方で、実践と照らしながら読み進める中で、その深い意味が理解できるようになります。靈的真理の理解は、“実体験”という靈的現場を通して深められていくものなのです。「たとえ世界中の書物を全部読むことは出来ても、その読書によって得た知識は、体験によって強化されなければ身についたとは言えません。靈的成長というのは実際に物ごとを体験し、それにどう対処するかによって決まります。」(シルバーバーチ4・83)

靈的真理を単なる知識や学問とせず、人生の指針・心を整理してくれる指導書として日常生活に活用するなら、時間とともに、真理が立体的に理解できるようになっていきます。皆さん方にはぜひ、そうした正しい靈的真理の学び方を身に付けていただきたいのです。靈訓の学習を通じて、生き生きとした靈的世界との交わりを知っていただきたいと思います。そのためには、常に『シルバーバーチの靈訓』を2、3冊手元に置き、“座右の銘”として絶えず読み返すことが必要です。寂しさで心が乱れたときの支えにしたり、心が不安定なときの拠りどころにしたり、力が萎えたときの活力源にするのが良いのです。実生活を常に「靈的真理」とともに過ごすようにするので。そうしたプロセスを2、3年続けるうちに、靈的真理との馴染みが進み、いつも心が真理によって満たされ導かれるようになってきます。こうして、いったん靈的真理との馴染みが形成されれば、他の巻の内容も早く正確に理解することができるようになっていきます。





このように実生活への適用とそこからのフィードバックを繰り返すことによって、「霊的真理」の深い世界が徐々に理解できるようになっていきます。優れたクリスチャンが聖書を常に手元におき、毎日のように繰り返し読み、心を整理してきたように、私達にも、心の糧として「霊訓」に接する姿勢が必要とされるのです。

霊訓は、それを知識として読んでいる限りは、その内容を性格に理解することはできません。読書会や学習会で霊訓を読むことは決して意味のないことではありませんが、その際、霊訓は日常生活を導くための道しるべ、あるいは心の問題を解決するための指導書として位置付けすることが大切です。霊的エネルギーが少しも湧き立たないような知識中心の学習をしたり、語句の解釈を巡って延々と議論したりといった学習では、何の進展も魂への刺激もありません。自分一人で霊訓をじっくり読む方が、どれほど魂にプラスとなるか知れません。何のための学習会なのか？ 単なる知識や新しい情報を得るためなのか？ 学問的対象として真理を学ぶためなのか？

もしそうであるなら、そうした学習会は時間の無駄と言わなければなりません。

再度述べますが、霊的真理を正しく理解し、さらにその理解を深めるためには、霊訓を“魂の糧”として日常的に繰り返し読み続けることが必要です。あれもこれもと手を広げたり、知識レベル・情報レベルにおいて霊訓に接する限り、霊的真理は私達の「霊性」と係わりを持つことができないのです。



この交霊会での知識は、週に一度わずか一時間あまりの間だけの知識として取っておいていただいても困ります。

シルバーバーチ 3・41

霊的真理は単なる知識として記憶しているというだけでは理解したことにはなりません。実生活の場で真剣に体験して、初めてそれを理解するための魂の準備が出来上がります。

シルバーバーチ 1・63

霊的真理は、これを日常生活に活用すれば、不安や悩み、不和、憎しみ、病気、利己主義、うぬぼれ等々を追い払い、地上に本物の霊的同胞精神に基づく平和を確立することでしょう。霊的真理を一つでも多く理解していくことが、あなた方の魂と霊的身体を霊界からのエネルギーを受けやすい体質にしていきます。

シルバーバーチ 1・97

スピリチュアリズムは“完璧な信仰”

さらに現在の日本のスピリチュアリズムにおける問題点の一つとして、スピリチュアリスト自身が、スピリチュアリズムは信仰ではないと思っていることがあげられます。これはスピリチュアリストが霊的真理を正しく理解していないのと同様に、スピリチュアリズムにおける重大で深刻な問題です。

シルバーバーチやインペレーターは、たびたび“実践”の重要性を強調します。シルバーバーチはよく

「大切なのは何を信じるかではなく、これまで何をなしてきたかなのです」とか、「人へのサービスこそが真の宗教です」と言っています。さらに、「どのようなことでも人のためになることならば、価値があるのです」とも言っています。何を信じたかではなく、何を行ったかが大切であると繰り返し

述べています。このため、かなり多くの人々が、スピリチュアリズムは信仰ではないと"錯覚"することになりました。

しかし、それはシルバーバーチやインペレーターの言葉の一面にとらわれた見方に過ぎません。シルバーバーチは別のところで、スピリチュアリズムは“完璧な信仰”でなければならないと明確に述べています。「ここにお集まりの皆さんは、完璧な信仰を持っていなければなりません。なぜならば皆さんは、死後に関する具体的な知識をお持ちだからです。」(シルバーバーチ4・17)

靈的真理に対して絶対の信頼、絶対の信仰を寄せるべきであると訴えています。

### "完璧な信仰"とは何か

完璧な信仰が何であるかは、シルバーバーチの言葉の中に示されています。シルバーバーチの姿勢は、まさに完璧な信仰の見本なのです。「靈的事実」に対する絶対信頼という信仰の見本なのです。

私達はシルバーバーチに倣って、スピリチュアリズムに対する確信を堂々と主張すべきです。スピリチュアリズムによってもたらされた「靈的真理」は地上のいかなるものより優れ、これに並ぶものはない。スピリチュアリズムのために働けることは、他のどんなボランティアよりも、ずっと価値のあることであると断言すべきなのです。それをしたとしても狂信ではありません。それどころか、そうした信念と絶対信頼を持ってスピリチュアリズムの素晴らしさを主張することこそが、正しい信仰と言えるのです。

スピリチュアリズムを他の地上の宗教と同列視することは、無知のなせる業です。スピリチュアリズムに絶対性を認めようとしなないことは、本質を何も理解していないということです。それは単なる偽善的<sup>そとづら</sup>道徳者としての生き方、外面だけを整え、他人との表面的な争いだけを避ければ良いという浅薄な生き方なのです。

スピリチュアリズムが絶対的な信仰・完璧な信仰であると認めることを嫌っている人は、もう一度「靈訓」をじっくりと読み返すべきでしょう。そして、

スピリチュアリズムを単なる道徳レベルから、<sup>いのち</sup>生命を懸けて信じ抜く絶対的な信仰レベル・完璧な信仰レベルへと引き上げるべきなのです。地上の全てのを捨てても、地上の全ての人々が反対しても、絶対にスピリチュアリズムだけは正しいとの信念を持つべきなのです。これがシルバーバーチに倣って、私達が身に付けるべき絶対的な信仰なのです。

スピリチュアリストは歴史上の殉教者に負けないほどの「神」「神の造られた法則」「靈的真理」「靈界の高級霊」に対する絶対信頼、完璧な信仰を持つべきです。スピリチュアリズムの正当性・優秀性・卓越性を、声を大にして訴えられない者が、どうしてスピリチュアリストと言えるのでしょうか。スピリチュアリズムだけは絶対に正しいと断言することは盲信でないどころか、純粹さと信念から出る当然の行為なのです。完璧な信仰とは、靈的真理(靈的事実)に対する絶対信頼であり、それはまさに真理に対する一途で揺るぎない確信のことなのです。

単なる信仰、盲目的信仰は烈しい嵐にひとたまりもなく崩れ去ることがあります。しかし立証された知識の土台の上に築かれた信仰は、いかなる嵐にもびくともしません。

シルバーバーチ4・16



スピリチュアリズムを狂信・盲信と錯覚する、  
この世の人々

シルバーバーチは、神と神の造った法則、さらに高級霊界に対する絶対信頼をたびたび披露します。シルバーバーチの霊界上層に対する絶対信頼は、見方によっては無条件の信仰、狂信・盲信に近いもののように映ります。スピリチュアリズムに反対する人々にとっては、シルバーバーチの言い方は狂信的断言のように感じられるはずで、一般的な観点に立てば、スピリチュアリズムは狂信であると考えたとしても当然です。現にスピリチュアリズムに反対する人々から、スピリチュアリズムといっても結局は、自分達の考えが一番偉い、一番正しいと思込んでいるだけで、狂信・盲信に過ぎないとの批判を受けることがあります。その人々にとっては、シルバーバーチは、シルバーバーチ自身が嫌う独断論者に他ならないこととなります。

しかし、シルバーバーチは私達に対していつも「盲信はいけません。常に理性に照らし合わせて自分の道をもとめなさい」と教えています。

この世の人々が、シルバーバーチが霊的真理や神の摂理に対する絶対性・無誤謬性<sup>むごびゅうせい</sup>を強調することを狂信・盲信だと思うのは、真理を知らないからなのです。私達がシルバーバーチの姿勢を偏狭ととらえることはないはずで、シルバーバーチが「地上には霊界に比較するものがない」と断言しても、それを独断と思うことはありません。「キリスト教は根本的に間違っている」と非難しても、シルバーバーチに愛がないとは考えません。シルバーバーチの強烈さ、激しい主張を、私達は決して狂信とは思いません。それどころか、シルバーバーチが常に冷静で客観的でバランスのとれた判断をし、愛情に満ちあふれた高級霊であることを確信しています。それは、私達が地上と霊界が全く価値観の違う世界であることを「霊的真理」を通じて知っているからなのです。

シルバーバーチの言う“狂信・盲信”とは

シルバーバーチが狂信や盲信ではいけないと言っている言葉を、信仰それ自体を否定するものと取ってはなりません。この点を多くの人々が勘違いしているようです。シルバーバーチの言葉の一部を取り上げ、スピリチュアリズムは信仰ではないと言うことは明らかに間違いなのです。スピリチュアリズムは信仰でないどころか、人生のすべてを懸けた完璧な信仰でなければならぬのです。

シルバーバーチの言う“狂信・盲信”とは、地上における特定の宗教や組織・思想・人物を絶対視し、これに無批判に服従することを指しています。霊界の事情と地上の事情は全く異なります。地上には絶対的なものは存在しません。地上はあまりにも不完全な世界であり、地上の社会は不完全な人間から成り立っています。そして不完全な組織しか作り上げることができません。そのためシルバーバーチは、地上のいかなるものに対しても絶対的な信頼を寄せてはならないと言っているのです。こうした深い事情を知らない人々が、スピリチュアリズムと他の地上の宗教や思想を同列に置いて非難したとしても、相手にしてはなりません。狂信・盲信とは、地上の宗教・思想・人物を絶対信頼し、それに絶対服従することを指しているのです。

人間は、誰か力のある存在に頼りたいという心の本性を持っています。自分以上に力のある者に従い、安心を得たいという傾向を持っています。このため地上では、洗脳がいつも簡単に行えることとなります。絶対的なものへの信頼性は、本来「神」に向けて発露されるように与えられているのですが、それが地上の特定の組織や人物に向けられることによって、狂信・盲信といったことが生じてしまうのです。不完全なものや人物を、絶対的な信仰の対象とするようになってしまうのです。そして、そこから人物崇拜・贖罪思想などの程度の悪い救済観が出てくることになるのです。これこそが“狂信・盲信”の実態なのです。





スピリチュアリズムの“信仰対象”とは

スピリチュアリズムは信仰ですが、その信仰対象とするもの、絶対的に信頼するものは、地上的なものや地上の人物ではありません。また特定の霊でもありません。信仰対象とするものは、神でありその摂理であり、霊的事実以外にはありません。贖罪などは一切認めません。すべて自分が霊的摂理に合わせ、自分で自分を救う自力信仰なのです。自分の霊的成長は自分で果たすという自己責任の信仰なのです。地上の他の宗教に見られる狂信・盲信の類いから、最も遠いところにあるのが「スピリチュアリズム」なのです。スピリチュアリズムの最高責任者である、イエスに対する崇拜も帰依も不必要な信仰なのです。

いかなる人物であろうと、いかなる書物であろうと、いかなる教会であろうと、いかなる指導者であろうと、それが地上の存在であっても霊界の存在であっても、たった一つのものに盲従してはいけない、それよりも大霊が定められた大自然の摂理に従いなさい。これだけは絶対に誤ることがなく、絶対に正しいからです。

道しるべ・237

霊的真理の実践こそが、スピリチュアリストの真価を決定する

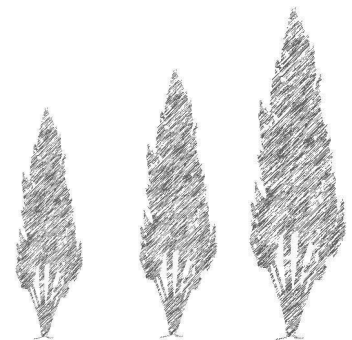
霊界が大変な苦勞をして「霊的真理」を地上にもたらしたのは、それがなければ、地上人の救いは成就しないからです。霊的真理は、私達がそれを指針にして霊的人生を歩み、霊的救いを得るために与えられています。実践することを初めから想定して与えられているのです。つまりスピリチュアリズムの霊的知識は思想や哲学や学問ではなく、「実践」をメインとした宗教の教えに近いものなのです。霊的真理は学問・研究の対象として、あれこれ解釈したり、勝手なこじつけをしたり、こねくり回したりす

るものではありません。どのように生きたら良いのか、どのように考え判断したら良いのかを知るために与えられたものなのです。その意味で、真理を手にしながらもそれを実行に移さない人は、せっかくの宝をわざわざ溝に捨てるようなことをしていることとなります。健康法を学んでも、それを実行しようとしない病人と同じことになるのです。

私達が「スピリチュアリスト」として霊界から認められるかどうかは、霊的真理を日常生活の中で活用しようとしているか否かで決められます。真理を手にしながらも知的好奇心のレベルに止まっている人は、スピリチュアリストとは言えません。

シルバーバーチもインペレーターも行為の重要性を強調します。シルバーバーチは次のように述べています 「大切なのは行いです。行為です。つまり各人の毎日の生活そのものです」「神を信じない人でも霊格の高い人がおり、信心深い人でも霊格の低い人がいます。霊格の高さは信仰心の多寡で測れるものではありません。行為によって測るべきです」「要は、その人が生きてきた人生の中身、つまりどれだけ人のために尽くしたか、内部の神性をどれだけ発揮したかにかかっています。大切なのはそれだけです。知識は無いよりは有った方がましです。が、その人の真価は毎日をどう生きてきたかに尽きます」（以上、シルバーバーチ3・71、6・27、4・140）

インペレーターは 「我々は信条にはさしてごだわりません。それよりも我々は行為を重要視します。何を信じていたかは問いません。何を為したかを問います。（中略）言葉より行いに、口先の告白よりも普段の業績に目を向けるのです。我々の説く宗教は、行為と習性の宗教であり……」（霊訓下・40）と言っています。

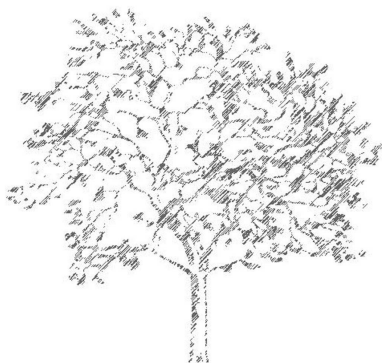


もしスピリチュアリズムに導かれながらも、依然としてスピリチュアリズムを単なる知識の対象として研究に終始していたり、真理は真理、日常生活は日常生活で別物だと考えているならば、霊界の導きを裏切ることになります。いつまでも知識の収集や無意味な学習会、言葉の遊びや哲学ごっこをしてはなりません。私達の意識が常に「霊的成長と奉仕・伝道」に向けられていないとしたら、スピリチュアリストとは言えないのです。率直に言って、シルバーバーチを読んでいると言いながら、霊的真理と全く無関係な歩みをしている人を見かけます。この世の人間と同じように、煩悩のままに流され傲慢になり、謙虚さとはほど遠い人がいるのです。内面的な努力をすることさえ忘れてしまっているような、情けない自称スピリチュアリストに出会うこともあります。

スピリチュアリズムの実践とは、奉仕だけではない

シルバーバーチは、「宗教とはサービスです」と言っています。人のためになることなら、どんなことでも価値があると云います。無償の奉仕は、まさにスピリチュアリズムの利他愛の実践に他なりません。奉仕こそ私達が常に心がけることです。人のためになること、人助けを人生の目標・日常生活の目的にしなければなりません。

しかしシルバーバーチが霊的真理の実践というとき、それはただ奉仕・人助けだけを意味しているではありません。この点についても多くの人々が勘違いしています。スピリチュアリズムにおける「実践」とは、利他愛の実践だけではありません。



生活は行為だけで成り立っているではありません。口にする事、心に思うことによっても成り立っております。行為さえ立派であれば良いというものではありません。むしろ行為が一番大切です。しかし口をついて出る言葉、心に思うこともあなたの一部です。

シルバーバーチ 4・29

シルバーバーチが明かした霊的成長のために踏まなければならない実践項目は、「霊主肉従の努力」「苦しみへの正しい対処」「利他愛の実践」「瞑想・祈り」の4つから成り立っています。スピリチュアリズムにおける実践とは、この4つの項目をすべて満たすことです。どれが欠けても霊的人生にとってマイナスとなります。すべてが霊的成長のための努力の内容ということになります。これらについては、すでにニューズレターで一つ一つ取り上げ述べましたので、ここでは省略します。

スピリチュアリズムとボランティアの違い

人のためになること、自分より恵まれない人々のために無償の奉仕をすることといえば、誰もがボランティアを思い出します。私達のサークルにも、全国各地のボランティア参加者や主催者から多くのお手紙をいただきます。人々のために奉仕するボランティアは、まさにスピリチュアリズムの利他愛と同一線上にあります。それは殊勝な心がけであり、同じ国民としてありがたいことと感謝せずにはいられません。

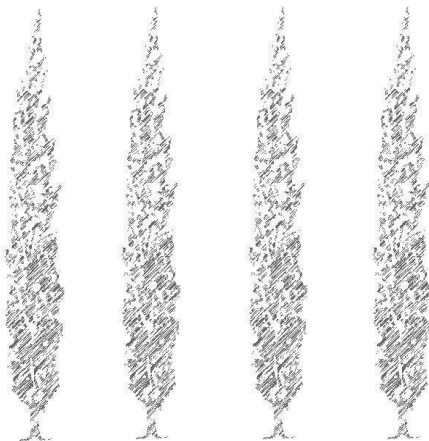
さて、ここで一つ注意しなければならないことがあります。それは奉仕の内容についてです。シルバーバーチは確かに、人のためになることなら何でも良いと言っています。その意味で、スピリチュアリズムとボランティアは同じと言えます。しかしスピリチュアリズムが最優先して与えようとしているのは、何よりも永遠の魂の救いをもたらす「霊的真理」であることを忘れてはなりません。霊界が大変な努力をしてスピリチュアリズムの運動を展開してきた



のは、靈的真理を地上人に教え、永遠の救いをもたらすためなのです。

この点を考えると、スピリチュアリズムに出会った人が、靈的真理の普及を第一にせず、それ以外のことを優先するのは間違いであることになります。靈的真理を知った人が、世間一般のボランティアと同じことをして満足するのは許されないことになります。真理を知っているということは、いまだ一般の人々が知らない救いの方法を知っているという特別な立場に立っているということを意味します。本当の救いを知らない人々に、真実の道を教える靈界の人々と同じ立場に立っているのです。スピリチュアリストは靈界の「高級靈の道具」として、靈的真理を一人でも多くの人々に伝える使命を持っています。地上の人々に対して、最高次元の奉仕と人助けをする特別な役割を担っているのです。

従って「靈的真理」を知りながら、それを他人に伝えようとする人は、大きな“利己主義”の過ちを犯すこととなります。どのようなボランティアよりも遥かに優れた人助けの方法を知りながら、自分なりのボランティアで善しとすることは、スピリチュアリズムに導かれた人間にとっては許されないことなのです。物質レベルでの人助け、肉体レベルでの奉仕は、他の人が代わりに務めることができます。しかし、靈的真理を伝え靈的救いの道を示すことは、他の人では代わりが効かないのです。大きな奉仕の立場とチャンスを与えられながら、わざわざ低いもので満足することは間違っているのです。



靈的摂理の存在を知った者の責任の重大性を説いて

地上の同胞の心身の糧となる靈的事実の中継役をする人たちには、大変な責任が担わされています。その態度いかんが地上生活において、あるいは靈の世界へ来てから、その責任を問われることとなります。

シルバーバーチ 4・32

私は決して、世にいう社会改革者たち 義憤に駆られ、抑圧された者や弱き者へのやむにやまれぬ同情心から悪と対抗し、不正と闘い、神の物的な恵みがすべての人間に平等に分け与えられるようにと努力している人々を、ないがしろにするつもりは毛頭ありません。ただ、その人たちは問題の一部しか見ていない 物的な面での平等のために闘っているに過ぎないということです。

不滅の真理・126

最優先すべき奉仕活動は、靈的真理の伝道

靈的真理の伝道を利他愛の実践の中心に置き、その上で、その他の人助け・奉仕に励めば良いのです。どちらに優先順位をつけるかで、私達のなす利他的行為の価値が決定されることとなります。靈的真理を知りながら、それとは関連性のないボランティアをしたところで、靈的価値は持ち得ません。どんなことでも人のためなら良いというのは、いまだ真理を知らない人にとってのみ言えることなのです。靈的真理を他人に先駆けて知ったということの重大性を、決して無視してはなりません。すでに一般の人々とは違った立場にいることを意識することが大切なのです。

シルバーバーチがもし、「靈的真理」を語るという使命を放棄し、自分なりに勝手に“心霊治療”に切り替えてしまうとすれば、大変な間違いを犯す

ことになるのは容易に想像がつくはずで

私の関心事は真理を普及することだけです。真理こそが最も大切です。私の言う新しい世界が基盤とすべき永遠不変の霊的真理を理解していただくために、私は、ひたすら自分を役立てることだけを考えております。その大事業から外れたことをする人は、本来同胞のために捧げるべきエネルギーをムダづかいしていることになるのです。

不滅の真理 162

病気で苦しむ人を心霊治療で癒すことは大変な人助けです。一般には、無料で病気を治してあげることほど偉大な奉仕・利他愛・人助けはないと思われています。しかしシルバーバーチは、肉体の病気を治すことより“心の覚醒”を促すことの方がずっと大切であると言っています。病気が治っても心が変化しなければ、その治療は失敗であるとまで言っています。これは「霊的真理」を伝えることが、いかに大きな人助けの行為であるかを示しています。霊的救いをもたらすことは、どんな肉体・物質レベルの奉仕よりも価値があることなのです。

「人のためになることをしなさい」という言葉は、スピリチュアリストにとっては、「いまだ霊的真理を知らない一人でも多くの人々にそれを伝えなさい」ということに他なりません。その上で、日常生活において出来るかぎり周りの人々に対して奉仕をしなさい、ということなのです。霊的真理の普及を奉仕の“核”とするということです。この順序を間違えてはなりません。



他人への奉仕・伝道の前に、まず自己の修養が必要

シルバーバーチは「霊的真理のメッセンジャーみずからがそれを日常生活において体現し、その誠実さと公明正大さに貫かれた生活を通して、見る人の目になるほど神のメッセンジャーであることを認識させることです。それから今度は積極的に世に出て、社会生活のすべての面に応用して行ってほしいのです。つまり、まずみずからが身を修め、それから他人のために自分を役立てる仕事に着手するということです」(シルバーバーチ5・51)と述べています。

奉仕活動をするより先に自己の修養をしなさい、ということですが、地上にいる限り私達は、どこまでも完全な人格を持つことはできません。未熟さをすっかり拭い去ることはできません。ですからここでの“自己の修養”とは、まず自分を霊的真理に合わせる努力をしなさい、という意味にとらえるべきです。自分の成長のための努力、内面的な努力を無視して他人に奉仕したとしても、意味がないということです。

現実には、自分自身に厳しく臨むことなく奉仕活動に一生懸命に励む人がいますが、その矛盾は時間とともに表面化することになります。奉仕活動にたずさわりながら、利己心から醜い対立や内部紛争が生じることがよくあります。人のためにと出して出発したボランティアが、いつの間にか当事者の“自己満足”に終わってしまうことが実に多いのです。キリスト教におけるボランティアは、神の愛に基づく精神に立脚しているため、個人的な見栄や自己満足といった問題を初めからクリアーしています。そのため人間の利己性から生じる問題の噴出は少ないのですが、単なる人助けといった道徳レベル・人道主義レベルのボランティアでは、最後には必ず人間の煩悩の問題に巻き込まれることになります。責任者ばかりでなくメンバー各自においても、厳しい自己コントロールが先行しないボランティアでは、道を間違えるような事態が引き起こされます。霊界における救いまでも見通したボランティアでない限り、いつの間にか偽善的行為に堕ちてしまうのが世の常

なのです。もっともシルバーバーチに言わせれば、偽善的ボランティアでもないよりはましとのことですが.....。

自己コントロールの先行しない奉仕活動、あるいは霊界を意識しない奉仕活動は、結局、単なる外部的な活動になってしまいます。ボランティアはいつの間にか人助けから自己満足へとすり変わり、相手よりも自分のための利己的な行為に変質してしまいます。ボランティアが自分の満足のための道具に過ぎないといったことにもなりかねません。

スピリチュアリズムでいうところの「利他愛」とは、ただ神と霊界の人々の目だけを意識してなす純粋な行為です。自分の利益や満足を求めず、ひたすら「神の道具」として無私の立場でなすべき行為です。一切の報酬を期待しない無償の行為なのです。自己犠牲を伴わないボランティアは、純粋な利他的行為とは言えません。自己の利益を確保した上で余ったものを与える、というのであれば、純粋な利他的行為とは言えません。

## スピリチュアリズム新時代の到来

### 本物のスピリチュアリズム普及の始まり

スピリチュアリズムとは、高級霊が苦勞してもたらした霊的真理を正しく理解し、霊的真理に対する絶対的な信仰を確立し、霊的真理を現実実践する霊的人生のことです。地上において真理 完璧な信仰 厳しい実践という3つのプロセスを繰り返しながら、全体の霊性を徐々に引き上げていく歩みのことです。霊的真理によって始まり、それを信仰に高め、実践に移す、一連のプロセスのことなのです。その結果、死後の世界に対する霊的準備がなされ、「霊的成長」という人間にとって最も有意義な地上人生を送ることが可能となるのです。

これまでの日本のスピリチュアリズムにおける問題点は、霊的真理が正確に理解されていなかったということです。部分だけの解釈や、肝心な点を見落としした解釈や、勝手な解釈をして、それで良しとされてきたのです。また真理が理解できても、それを知識レベルに止めるだけで、信仰レベルにまで意識化することができませんでした。スピリチュアリズ

ムを生き方の信念とすることができなかつたのです。スピリチュアリズムが信仰であることを意識的に避けようとする愚かしい風潮さえ生まれてきました。

「霊的真理」は、信仰の指針として絶対視されなければなりません。スピリチュアリズムは教条主義だと非難されても、それを恐れてはなりません。

さらにもう一つの大きな問題点は、霊的真理を真剣に実践に移そうとする人々がいなかったことです。それどころか、スピリチュアリズムの名を騙り、利益追及や名誉追及が堂々<sup>かた</sup>と行われてきました。スピリチュアリズムの霊的知識をバックにして、祈禱や心霊治療で金儲けをしたり、新興宗教と同じようなグループを作ったりといったことが行われてきました。現実には、スピリチュアリズムの名を汚すようなことばかりが横行してきたのです。その結果、良識ある人々にスピリチュアリズムに対する幻滅を与えることになりました。

日本には古くからスピリチュアリズムが紹介されてきたものの、現在に至るまで、それが正しく実を結ぶことはありませんでした。スピリチュアリズムの正しい伝統が、今なお日本には定着していないのです。これが日本のスピリチュアリズムの偽らざる実態なのです。あまりの内容のなさに、霊界の高級霊が働きかけたとも働きかけられない状態だったので、これらはすべて真理の正しい理解・意識の信仰化・純粋な実践という、スピリチュアリズムの基本原則が全くないがしろにされてきた結果です。





一方、いまだスピリチュアリズムと出会うことなく、従来の宗教において一生懸命に歩んでいる多くの人々がいます。わずかばかりの霊的真理が与えられているに過ぎない中で、命懸けの信仰をし、人生のすべてをそこに懸けている人々がいます。スピリチュアリズムのような高度な真理はないにもかかわらず、スピリチュアリズムが目指す「完璧な信仰心」を持ち、自分を捨てて「純粋な実践」に邁進しているのです。そうした人々に対しても、霊界の準備は着々と進められています。時期が至れば、今は他の宗教で励んでいる人々も、やがてスピリチュアリズムのもとへ導かれることとなります。このような人々が一度「スピリチュアリズム」と出会えば、スピリチュアリズムの霊的真理の価値を初めから正しく理解し、スピリチュアリズムを即座に信仰的にとらえ、スピリチュアリズムのために人生を捧げることにな

るでしょう。一気に高いレベルでの歩みが始まるのです。これまで20年、30年とスピリチュアリズムに慣れ親しんできた人々を乗り越えて、初めから「高級霊の道具」として歩み出すこととなります。つまり今現在、多くの人々が将来のスピリチュアリストとしての道を、他の宗教の中で歩んでいるということなのです。

先の者が後になり、後の者が先になるといったことが、これからの日本のスピリチュアリズムにおいて現実に起こってきます。そうした純粋な人々によって、日本に正しいスピリチュアリズムが定着するようになっていくのです。一旦、正しいスピリチュアリズムの伝統が確立しさえすれば、霊界の働きかけはさらに強烈になり、日本のスピリチュアリズムは加速度的に広がっていくようになるのです。



# スピリチュアリズムから見た エドガー・ケイシー

## (1) エドガー・ケイシーの使命とは

スピリチュアリズムにおいて可能となる、  
ケイシーの正しい評価

「スピリチュアリズムでは、エドガー・ケイシーをどのように考えたらよいのか」という質問がよく寄せられます。チャネリングや霊界通信、あるいは新新宗教の教義を検討して正しく批評することは、一般の人々にとってほとんど不可能です。どこかおかしいと思っても、それをはっきり指摘することはできないのが普通です。ケイシーのリーディングについても同じことが言えます。ケイシーのリーディングのどこが正しくてどこが間違っているのか、大半の人々には判断がつかないとしても当然です。

ケイシーのリーディングは、結果的に、スピリチュアリズムの底辺の一つとしての役割を果たしました。スピリチュアリズムの観点から見ると、彼のリーディングにはあまりにも多くの問題点や間違いがあります。現在でも世界各地に大勢のケイシーファンがいて、彼らによってケイシーは、20世紀最大の霊能者であり、予言者であり、最高のスピリチュアル・ヒーラーとして尊敬されています。しかし、そうした評価はどこまでも、霊的事実と霊的基準を知らないところでの過大評価であり、盲目的評価に過ぎません。これまで「霊的事実」の観点からなされた、ケイシーに対する評価・批判はありませんでした。

ケイシーのリーディングについての正しい批評は、霊的事実・霊的真理を基準としない限りできません。彼のリーディングは、あくまで「霊的事実」によって評価・批評されるべきものです。そしてそれを可能にするのは、唯一スピリチュアリズムだけなのです。スピリチュアリズムほど霊的世界の事実を明ら

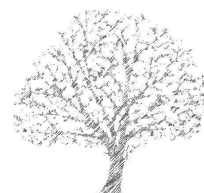
かにしているものは他にはありません。ケイシーのリーディングを高いところから見下ろすことができるのは、スピリチュアリズム以外にはないのです。

ここでは「霊的真理」に照らして、ケイシーのリーディングを検討していくことにします。

### ケイシー・リーディングの使命

まず「ケイシーの使命は何であったのか」について考えてみます。結論を言えば、ケイシーは、明らかにスピリチュアリズムの一端を担った人物であったということです。しかしシルバーバーチやインペレーターが、人類の「霊性」の最頂点部分を担当していたのと事情は全く異なります。彼の役目はどこまでも、伝統的キリスト教に対してスピリチュアリズムの霊的真理普及の道を準備し、初期的な霊的道筋をつけるということでした。ケイシーの背後には、スピリチュアリズムにおける指導的責任を担った高級霊が控えていましたが、直接彼の指導に当たったのは、それほど高い霊ではありません。

ケイシーによって、それまでアメリカの伝統的キリスト教にはなかった、「死後生の存在」(靈魂説)「輪廻再生の存在」(再生説)「カルマの法則の実在」(カルマ的因果説)「スピリチュアル・ヒーリング」の可能性が示されました。これこそが、まさにスピリチュアリズムの流れの中における彼に与えられた使命だったのです。ケイシーによって、その後アメリカに始まるニューエイジの先鞭がつけられました。またホリスティック医学の前身ともいべき動きが作り出されることになりました。



## (2) ケイシーのリーディングとは

1万4千件にも及ぶケイシー・リーディング

ケイシーが催眠状態で、病人の診察をしたり、あの世の情報を伝えてきたことはよく知られています。これが“リーディング”と呼ばれるものです。現在では、速記された1万4千件ほどのリーディングが閲覧できるようになっています。その中で最も多いのが医療リーディング（フィジカル・リーディング）で9600件、ついで多いのがライフ・リーディングで1919件となっています。

医療リーディングは、トランス（催眠）状態下のケイシーが患者の肉体を透視によって診察し、治療のための処方を示したものです。それ以外のリーディングは、ケイシーが直接アーカシックレコードにアクセスし、そこから情報を得たということになっています。

ケイシーの医療リーディングの情報源は

まずフィジカル・リーディング（医療リーディング）については、それが催眠下にあったケイシーの口から、「我々は……」といった複数形で語られている事実に注目しなければなりません。これは情報提供者（ソース）がケイシー自身ではなく、他の複数の存在であることを示しています。つまり複数からなる霊的存在・霊達によって情報が送られてきているということです。従ってフィジカル・リーディングは、ケイシー個人の存在とは全く別のところで進められていることとなります。ケイシーは、霊界で医療行為に携わる霊達の“霊媒”（チャネラー）に過ぎないということです。トランス下で自分が語った言葉をケイシーは覚えていませんが、これは霊媒現象において、霊媒に一般的に見られる傾向なのです。このことから判断しても、ケイシー・リーディングは「霊媒現象」であることが分かります。



“アーカシックレコード”とは

さて、このフィジカル・リーディング以外のリーディングについては、ケイシーがあこの世のアーカシックレコードを読み取り、情報を得ていたということになっていますが、その実情はどのようなものだったのでしょうか。ケイシー自身は、自分が直接アーカシックレコードから情報を得ていたと思っていたようです。彼はリーディングの中で、自分がアーカシックレコード（記録の殿堂）に至るまでの詳しい様子を述べています。では果たして、ケイシーは本当に、自分一人の力でアーカシックレコードにアクセスしていたのでしょうか？ まず最初に問題となるのはこの点です。

霊界には、宇宙・地球に関するありとあらゆる情報・知識が収められた巨大な貯蔵庫・図書館のような場所があります。地上人には知られていない過去の歴史の記録や、地球上に存在する全ての書物のコピーや個人に関する情報もそこにあります。そして霊界にいる霊達は、そこから必要に応じて情報入手することができます。一方、私達個人のレベルにおいても、潜在意識の深部には過去世についての全ての記憶がしまい込まれています。これは私達の一人一人が、個人レベルのアーカシックレコードを持っているということです。

霊界においては、必要に応じてアーカシックレコード（記録の殿堂）から私達の過去の情報が引き出され、スクリーンのように示され、他の者にも知られるようになっています。地上時代の生き方を反省したり、自分に残されているカルマを自覚する時には、そうした方法が使われることがあります。

このような霊界の事情を考慮すれば、ケイシーがアーカシックレコードからさまざまな情報を得ていたということは、理論的には成り立つと言えます。ケイシーの信奉者にとっては、ケイシーという優れた能力を持った人間であればこそ、アーカシックレコードから情報を得るといふ離れ業を成し遂げることができたということになるでしょう。



地上人には不可能な、“アーカシックレコード”へのアクセス

しかし結論を言えば、肉体を持った人間が、自分一人の力でアーカシックレコードから直接情報を引き出すことは不可能です。たとえケイシーが卓越した能力の持ち主であったとしても、肉体を持っている限りそれはできません。幽体離脱の状態下にあっても不可能なことなのです。それは死んで霊体だけになり、肉体からの影響を全く受けなくなった時点においてのみ、初めて可能となります。肉体を持つことによって霊的能力に大きな制限が加えられている以上、“アーカシックレコード”という純霊的対象物にストレートにコンタクトすることはできないのです。

アーカシックレコードにアクセスするという行為は、ケイシーが幽体離脱中に複数の霊達に導かれて行われたことなのです。十分に霊性の発達していない人が死後、霊界入りして間もない時には、すぐ近くで自分を導いてくれている指導霊の存在に気がつかないのが普通です。霊界の環境に慣れるにつれ、背後の指導霊の存在を自覚するようになります。ケイシーの場合もそれと同じで、自分の指導霊の存在に気がついていませんでした。彼がアーカシックレコードの場に赴きそれを読むという一連の行動は、実は背後にいる指導霊によって仕組まれたことだったので、指導霊がアーカシックレコードから情報を読み取り、それをテレパシーによってケイシーに伝えていたということなのです。ケイシーはこうした指導霊の存在を自覚できないまま、すべてを自分一人でしたと思いついていたのです。

さて、ここでもう一つ問題となるのは、ケイシー・リーディングにおいて、果たしてどの程度までが本当にアーカシックレコードからの情報であったのか、ということです。結論を言えば、ケイシーがアーカシックレコードから得たとされる情報の多くが、単なる地上人の潜在意識の中の知識であったり、他の低級霊の与えた偽の情報であったということなのです。これについては後程詳しく述べることにします。

**\* 霊界の情報を地上人に正確に伝えるについては、極めて困難が伴います。一般的には、霊界の情報を地上に伝える段階において、その内容が大きく歪められることとなります。幽体離脱中の体験を、そっくりそのまま伝えることが難しいと同様です。ケイシーの場合にも、そうしたことがあったと考えられます。**

ケイシー・リーディングの本質は「霊界通信」

いずれにしてもケイシー・リーディングは、彼が“霊媒”（チャネラー）となって霊界にいる霊が情報を伝えるというケースと、彼が“幽体離脱”して霊界での体験や情報を伝える（\*アーカシックレコードからの情報も含む）という2つのケースから成り立っていることが分かります。これらはどちらも「霊界通信」に他なりません。ケイシー自身が、霊の関与によってアーカシックレコードから情報を入手していた事実に気づかなかつたため、そのリーディングは彼独自の方法であるかのように受け取られてしまいましたが、本当は指導霊達の関与・協力の下であって進められたことだったのでした。

ケイシー・リーディングは、本質的にはリーディング(\*アーカシックレコードの読み取り)というより、霊界通信と考えるべきものなのです。ケイシー・リーディングを「霊界通信」として見ていけば、彼のリーディングにおける、あらゆる問題点や矛盾点が明確にされることとなります。



## 催眠トランスに伴うさまざまな問題

### ケイシー・リーディングと潜在意識の関与

ケイシー・リーディングは、彼が催眠（トランス）状態下において行われたという事実を重要視しなければなりません。催眠状態にあっては、次のような事態が生じる可能性があるからです。

霊が、催眠状態下にある地上人を霊媒として用いて語る。（霊媒現象）

幽体離脱によって霊体である世のさまざまな体験をし、覚醒後それを語る。

潜在意識内にあった知識を、一見、霊界通信のように語る。

潜在意識内にあった知識を材料として、フィクションストーリーを作り語る。

相手の誘導に応じて二セの答えをする。二セの人格を形成する。

透視能力やテレパシー能力が高まり、相手の潜在意識を読み取り語る。

こうしたことが、ケイシーにおいても同様に存在していた可能性が考えられます。彼のリーディングを見ていくについては、それを「霊界通信」としてとらえるだけでなく、催眠にともなう「潜在意識の作用」の点からも考慮していく必要があります。霊界通信には、常に潜在意識の介入という問題がつきまとうのです。

\*最近では、ケイシーサイドからも、彼の情報入手について客観的な見方をするような動きが出てきました。従来のように、アーカシックレコードだけがケイシーの情報ソースとする考えから、ケイシー自身の潜在意識内の知識や記憶、テレパシーによって入手された情報、透視によって入手された情報、幽体離脱中の記憶などが、情報ソースとして考慮されるようになってきました。

（『エドガー・ケイシーの全て』サンマーク出版 85～86、180頁）

## （3）ケイシー・リーディングの 霊的問題点 通信ソース に関する問題

ケイシー・リーディングが「霊界通信」であるということになれば、これに係わる“霊”が問題となります。どの程度の霊がケイシーを導いていたのか、通信ソースのレベルはどの程度のものだったのか、あるいは通信霊（関与霊）は一人なのか複数なのか、ということが問題となってきます。

ケイシー・リーディングにおける問題点の一つは、明らかに低級霊の介入が見られるということです。これについては次の予言の箇所、輪廻カルマの箇所において詳しく述べることにします。問題点の二つ目は、リーディングの内容に霊的事実との著しい食い違いが見られるということです。これについても後程詳しく述べることにします。こうした二つの問題点は、ケイシー・リーディングには、高級霊による強力な守護態勢がなかったこと、そのために低級霊の介入を排除できなかったことを示しています。シルバーバーチなどの高級霊の霊界通信では、常に徹底した守護態勢・万全の態勢が敷かれ、他の霊の介入を完全に排除します。ケイシー・リーディングには、そうした十分な態勢がなかったのです。このことは、それが高級霊からの通信ではなかったことを証明しています。通信の純度という点において、大きな欠陥を持っていたことを意味しています。

ケイシー・リーディングの中で最も多くの部分を占める医療リーディング（フィジカル・リーディング）については、特別な問題点は見られません。比較的良質の通信霊（ソース）からの情報が安定して送られてきています。ケイシー・リーディングには、医療リーディングに見られるような比較的良質なソースと、ライフ・リーディングや予言的リーディングに見られるような、明らかに低級霊・未熟霊と思われるソースからの情報が入り交じっています。「通信霊の玉石混淆」<sup>こんこう</sup>これがケイシー・リーディングの最大の問題点なのです。

通信ソースのレベルという点から、また通信の純度という点から言えば、現在の二流のチャネリング

と大差ありません。靈的事実と空想が交ざり合っ  
てゴチャゴチャになっています。その原因は、ケイ  
シー・リーディングが複数の通信靈の情報から成り立  
っているからです。ケイシー・リーディングは分量  
も多く、論理的で一見すばらしい通信のように映り  
ますが、実際は多くの問題を抱えた「靈界通信」な  
のです。

#### (4) 予言リーディングについて

予言リーディングにおける明らかな“低級靈”  
の関与

ケイシーは“眠れる予言者”として知られていま  
す。しかし、現在残されているケイシー・リーディ  
ング1万4千件のうち、地球の大異変についての予  
言はわずか26件に過ぎません。この点から言えば、  
ケイシーを眠れる予言者というのは明らかに偏った  
見方です。しかも問題はその中身です。ケイシー信  
奉者は、いくつかの予言が的中したことを並べ立て、  
彼の予言の的中率が高かったことを強調します。

ケイシー・リーディングの予言としてよく取り上  
げられるのが、日本やカリフォルニア沈没に関する  
ものです。これは一般には、「1998年に日本が  
沈没する」という予言として知られています。しか  
し彼のこの予言は、本当は「1958～98年に変  
異が起こる時代に入っていく」と解釈すべきです。  
この予言に対しある者は、日本が沈没するという表  
現は、「経済的な下降・不況を示唆している」と言  
います。またある者は、これはあくまでも未来の可  
能性を示しているのであって、未来は確定している  
わけではなく、「人間が責任を果たさなかった場合  
には、こうした天変地異が起こる可能性がある」と  
とらえるべきだと言います。一般的にケイシーファ  
ンは、どこまでも身<sup>みびいき</sup>贖ともいえる立場から、彼の  
予言を好意的に受け止めようとします。それはノス  
トラダムス信奉者が、1999年7月の天変地異の  
予言が外れても、なお別の解釈を試みて、その正当  
性にこだわるのと相通じるものがあります。

スピリチュアリズムの観点に立てば、そうした予  
言の解釈は二の次です。ケイシーの予言をどのよう

に解釈するかということは、本質的な問題ではあり  
ません。スピリチュアリズムでは、予言をするとい  
う事実そのものを重要な問題点としているのです。  
予言リーディングにおいては、「ハラリエル」と名  
乗る靈的存在が係わっていたことが確認されていま  
すが、こうした低級スピリットが、リーディングに  
介入していた事実を問題とするのです。これまで何  
度も述べてきましたが、高級靈は、地上人が解釈を  
巡って混乱を起こすような通信を送ることは決して  
ありません。また単に不安を<sup>ま</sup>撒き散らすような予言  
をすることも絶対にありません。そうしたことをす  
るのは“低級靈”だけなのです。

以上のような点から見たとき、ケイシー・リーデ  
ィングの予言には低級靈の関与が明らかです。なぜ  
1958～98年に天変地異が始まる可能性がある  
というような、<sup>もったいぶ</sup>勿体振った、分かりにくい、曖昧な  
言い方をする必要があるのでしょうか。ケイシーの  
予言は、ノストラダムスの地球滅亡の予言と本質的  
に同じ類いのものなのです。低級靈のカラカイ以外  
の何物でもありません。従って、それをどのように  
解釈すべきかなどという問題ではないのです。

\* 地球は今まさに、地上人類始まって以来の大転換期を  
迎えようとしています。それはどこまでも「靈的变化・  
靈的価値観の転換」であって、物質的な世界のことは  
ありません。物質世界のすべては、神の造られた物質法  
則によって支配され、それは人間の行為・意思とは無関  
係に活動しています。人類が責任を果たしたら天変地異  
から免れることができると考えるのは間違いです。天変  
地異と人間の行為を結びつけることは一見筋が通った見  
解のように思われますが、それは事実ではありません。

「靈的事実」に無知だった時代の人々は、人間の行為  
を天変地異と関連づけて考えていました。昔の人々はす  
べてを神の仕業と考え、これを信仰という人間の努力に  
よってコントロールすべきものと考えていました。天変  
地異という神の罰<sup>ばち</sup>が当たらないように、何らかの手段を  
講じることができると思っていたのです。

ケイシーの天変地異の予言を正当化するために、人間  
の自由意志と天変地異を結び付けて解釈しようとするのは、  
まさにそれと同じ“迷信的信仰”を主張することに他な



りません。時代遅れの信仰を持ち出して自説を正当化しようとするのは、こじつけ以外の何物でもありません。

人間のカルマが関係するのは、天変地異といった広範な物質世界に関してではありません。天変地異は、物質の法則の支配下における地球の物理的運動に過ぎないのであって、人間の因果的世界とは全く無関係なものなのです。いかなる天変地異が起こっても、それ自体は物質的法則に基づく現象に過ぎないのです。人々が改心することと、天変地異の問題は別次元のことなのです。たとえば地球上の全人類が心を一つにして祈ったとしても、物理的な法則によって進んでいく物質世界の動きを変えることはできません。

ケイシー・リーディングにおける通信霊ハラリエルは、明らかに低級霊であり、その一連の予言は、単なるカラカイやイタズラです。本当は、こうしたいい加減な予言じみたことを通信してくるのは“低級霊”であると、初めから見抜かなければならなかったのです。そうしたものには取り合わず、頭から無視すべきだったのです。なぜなら低級霊は、地上人に混乱と不安を与えることだけを目的として働きかけてくるからです。低級霊は、部分的に正しいことを言って信用させ、同時にデタラメや作り言を並べたてて地上人を騙し、混乱させようとします。低級霊であっても、近い未来の出来事を予知することぐらいはできるのです。わずかばかりの予知が的中したからといって、どういうことはありません。

高級霊は、本当に地上人類にとって必要性がある場合以外には、決して予言などしません。ましてや幾通りにも解釈できるような曖昧な予言など絶対にしません。地球規模の大変革があるなどと、わざわざ混乱を生じさせるような言い方をすること自体が、まさに“低級霊”の本性を示しているのです。重要な問題であれば、なおさら分かりやすく丁寧に、誤解を招かないように配慮するのが高級霊のやり方なのです。

ケイシー信奉者は、低級霊の罠にまんまと掛かっています。馬鹿げたことと一蹴すべきものを好意的に解釈し、低級霊の思う壺に嵌っているのです。

\* こうした問題を引き起こしている最大の原因は、大半の人々が、低級霊の通信とまともな通信を見分ける初歩的な霊的常識を持っていないからです。そのため低級霊からの通信を、さも価値のあるもののように思ってしまうのです。霊的な真偽を判別する力を持たない多くのケイシー信奉者は、リーディングを初めから素晴らしいものと決めつけ、その結果、自ら混乱し“低級霊”の餌食となっているのです。

## 古代大陸アトランティスについて

ケイシーは、アトランティスに関しても数多くのリーディングを残しています。しかし、これも結論を言えば、種々の予言と同様に、低級霊あるいは知的な未熟霊によるものと考えられます。アメリカ人の多くがアトランティスでの前世があるとか、アトランティス大陸が再び海上から姿を現すといったことが述べられていますが。それらは空想以外の何物でもありません。1910～30年にかけてアメリカでは、アトランティスなどの超古代史がブームとなりました。そうした時代的動向を背景にして、このようなリーディングが作られたと思われる。

外部からの情報がケイシーの潜在意識に取り込まれてフィクションストーリーとなったのか、あるいは低級霊のカラカイによる意図的なフィクションなのか、あるいは相談者の潜在意識が作り出したフィクションによるものなのかは断定することはできませんが、いずれにしても事実とは掛け離れたものであることは明らかです。

\* ケイシー・リーディングが、アトランティス大陸の遺跡が発見される可能性がある場所としていたのは、バハマ諸島のビミニ島でした。彼がアトランティス浮上の年として予言した1968年に、ビミニ島近くの海中で建造物の土台らしきものが見つかりました。ケイシー信奉者が色めき立ったのは言うまでもありませんが、結局、その後の調査でそれらは自然物であったことが判明しました。

## (5) ライフ・リーディングと、 輪廻転生・カルマの法則に ついて

### ケイシー・リーディングの功績

ケイシー・リーディングの功績は、輪廻転生の事実ならびに、それを支配するカルマの法則（因果律）の存在を明らかにしたことです。これはライフ・リーディングの中で示されています。ケイシー・リーディングのカルマの理論は、スピリチュアリズムにおけるカルマ理論・因果観とほぼ一致しています。

「自分の行動や態度・考え方がカルマを形成し、それが次の地上人生に影響を及ぼすようになる」「人間は自由意志を活用することによって運命を変えることができる」「魂の進化の過程は霊界の記録簿（アーカシックレコード）に記されている」「魂の進化については、インディビジュアリティとパーソナリティを区別して考えなければならない」「地球は魂の修行場として位置付けしなければならない」など、スピリチュアリズムの再生観・カルマ観（因果観）と同じ内容を述べています。この点で、ケイシー・リーディングのカルマ観は、地上の他の宗教よりも数段優れたものと言えます。

こうした再生観・カルマ観は、人間の生まれ変わりを否定するキリスト教に、大きな挑戦状を突き付けることになりました。伝統的なクリスチャンであるケイシーを使って、キリスト教の教えに反するカルマ観を提示させた背景には、霊界サイドの意図があったものと思われます。ケイシー・リーディングはアメリカにおいて、まさにスピリチュアリズムの「霊的真理」の普及に先立って、霊的道を切り開くために準備されたものと言えるのです。ケイシー・リーディングは、再生の事実とカルマの法則の存在を人々に伝えるという大きな役割を果たしました。ケイシー・リーディングの示した再生観・カルマ観は、こうした意味で画期的なものだったのです。

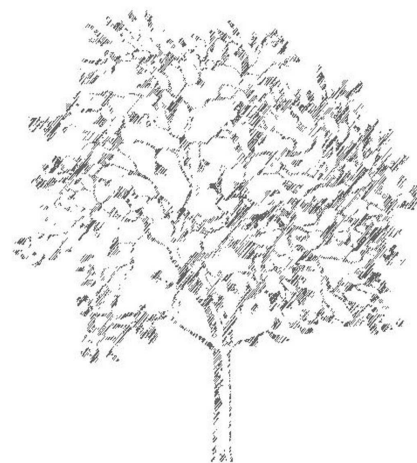
しかし、ライフ・リーディングに示された全ての内容が正しいというわけではありません。理論的な概要としては正しかったのですが、ケイシーが相談

者を前にして語った具体的な“前世像”は、およそフィクションとしか言いようがないものです。アーカシックレコードを読み取り、前世を明らかにしたということになっていますが、それにしては余にもお粗末な内容がほとんどです。

### 正しい再生観とは

さて今、私達はスピリチュアリズムによって再生の仕組みについて、かなり細部に至るまで知ることができるようになってきました。それによれば、「死 幽界 霊界の類魂の一員となる 地上へ再生する 体験を類魂へ持ち帰る 類魂の進化」という一連のプロセスを経る中で向上の道を歩むということになります。このことから分かるように、再生については、霊界の「類魂」の存在を抜きにして考えることはできません。自らが類魂の一員となることによって同じ類魂のメンバーの地上体験を共有し、類魂全体として魂の成長をなすのです。それと同時に、個人レベルにおいては、前世で作ったカルマを次の地上人生で償うという目的を持っています。このように再生には二つの目的があります。

「類魂」の存在を抜きにした再生という事実は存在しません。「類魂」の存在を前提としない輪廻・カルマ観は事実とは言えません。類魂の存在と、類魂を媒介とした霊的進化の実態は、スピリチュアリズムによって初めて明らかにされました。ケイシー・リーディングでは、この点には全く言及していません。



再生を論じるについてのもう一つの重要点は、「インディビジュアルリティー」と「パーソナリティー」についてです。この二つの区別を明確にしないところで、再生の問題を論じることはできません。再生するのは一個のインディビジュアルリティーの他の部分であって、パーソナリティー（今の自意識体）ではありません。今の私を基準とする以上、前世も再生もないのです。インディビジュアルリティーの他の部分が地上に現れるという意味において、初めて再生があると言えるのです。それを地上サイドから見ると、全く別の人物（別の人間）が存在することになります。インディビジュアルリティーにおいては同じ存在であるということです。地上人がそれを実感的に理解するのは不可能です。なぜなら地上人にとっては“自意識”だけが自分自身と感ぜられるようになっているからです。以上のような霊的観点に立ってのみ、再生の問題を正しく論じることができるのです。

一般的に言われるような同一人物・同一自意識体（今、私と自覚している私）の再生は事実ではありません。退行催眠などによって“前世像”としてイメージされているものは、虚構の同一人物・同一自意識体です。その上、退行催眠では、潜在意識が作り出す前世のフィクションストーリーを事実と錯覚するという二重の間違いを犯しています。

幸いなことにケイシー・リーディングでは、このインディビジュアルリティーとパーソナリティーの区別を明確にしています。厳密な意味では、ケイシーとスピリチュアリズムとでは食い違いが見られますが、インディビジュアルリティーとパーソナリティーの区別を明確にしている点については、大いに称賛されるべきです。

### 空想に過ぎない具体的な“前世像”

ケイシー・リーディングの輪廻・カルマ観は、理論的な大筋においてスピリチュアリズムと一致しています。しかしケイシー・リーディングには、再生における絶対的な鍵である「類魂」の存在に対する指摘・考慮が見られません。このことは、ケイシーの再生観には根本的な欠落があるということになります。この最大の致命傷が、次に述べる“惑星間転生”という、およそ事実とは掛け離れた転生観を作り出すことになりました。

再生に関するケイシー・リーディングの第一の問題点は、ケイシーが相談者に対して指摘した前世が、本当にアーカシックレコードからの情報であるかどうか、ということです。これについては極めて疑わしいと言わざるを得ません。ケイシー・リーディングが指摘する具体的な“前世像”は空想に等しいものであり、地上人の好奇心に付け入った低級霊のカラカイか、あるいは相談者の潜在意識が作り出したフィクションストーリーの可能性が大きいと考えられます。

ケイシー・リーディングによって自分の前世像が分かるということが知られるようになると、それを期待する相談者の潜在意識の中で、前世のフィクションストーリーが無意識のうちに作り出されることになります。それを低級霊が読み取って、ケイシーを利用して述べるという可能性が考えられます。あるいはケイシーの潜在意識が自動的に反応して、相談者の潜在意識の内容を語ったものとも考えられます。いずれにしてもケイシー・リーディングで指摘されている前世像は、「霊的事実」から掛け離れたフィクションストーリーであることは明らかです。





## 惑星間転生について

ケイシー・リーディングにおける輪廻・再生観の最大の特徴は、人間が惑星と地球とにまたがって再生の過程を経るというものです。スピリチュアリズムでは、前世と現世の間の期間は当然のこととして霊界（\*場合によっては幽界）にいるということになります。ところがケイシー・リーディングでは、死後は霊的世界に行くことは認めつつも、その行く先を惑星（惑星霊界あるいは霊的惑星領域？）としています。生（地上生活）と生（地上生活）の中間世界について、占星術的な独自の解釈をしています。例えばケイシーは、地上に生まれる前は「天王星」（天王星霊界）に住んでおり、さらにもう一つ前の地上人生（\*ベインブリッジと名乗るアメリカ人だったということです）を始める以前は、「金星」（金星霊界）にいたと言っています。このように人間の魂は、惑星と地球の間を次々と転生していくと言うのです。

これは一見スケールの大きな理論となっていますが、スピリチュアリズムによって示された霊的事実とは明らかに違っています。「霊的事実」と照らしたとき、惑星間転生は単なる空想の産物でしかありません。ケイシー・リーディングが描くような中間世界は事実ではありません。高級霊がこうした輪廻観を認めることはあり得ません。

## 惑星間転生説の“通信霊”は誰か？

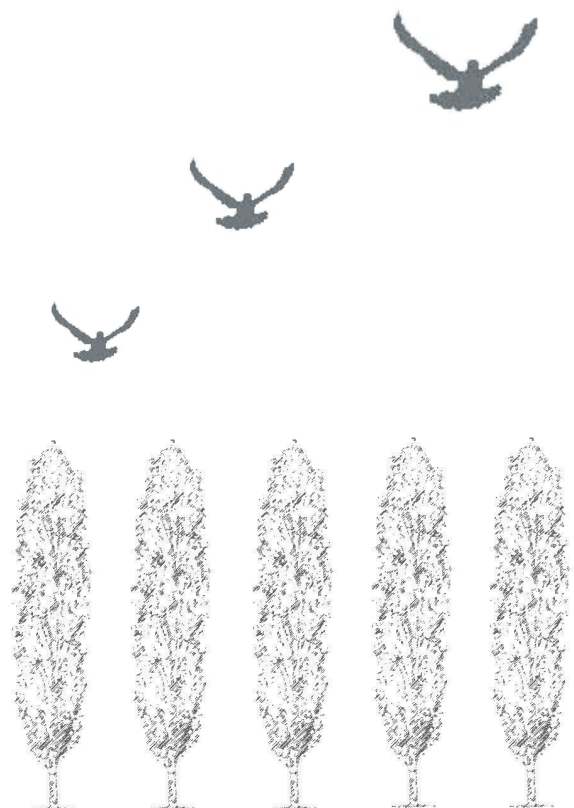
では、この独特の惑星間転生説は、どのようなところから発生したものなのでしょう。ケイシー信奉者にとっては、この輪廻観は最も誇るべきものであり、アーカシックレコードの中に示されているということになるでしょうが.....。

結論を言えば、これは予言の場合と同様に、低級霊の通信から作られたものと考えられます。但し、通信霊は予言リーディングに係わった低級霊（ハラリエル）とは別の霊でしょう。通信内容の質が全く異なるからです。ではこの場合は、どのような霊が関係していたのでしょうか。

まず“単なる低級霊”が考えられます。こうした霊達は、地上の相談者の関心・好奇心を読み取り、彼らの潜在意識の中に作られたフィクションを盗ん

だり、意図的にニセの前世ストーリーを作り出して地上人をからかおうとします。ケイシーの背後霊団は低級霊の働きかけを排除することができず、その介入を許しています。

もう一つのケースは、幽界にいる“知的な未熟霊”です。幽界には、地上と同様の学問研究を続けている一群がいます。彼らは霊的浄化が進まず、霊的意識が開かれていません。そのため地上時代と同じことを相変わらず継続しているのです。そして自分なりの持論を出し合って議論し満足するといった、無意味な生活を続けています。その中には、天文学に興味を持っている者や地球の歴史に興味を持っている者もいます。彼らは地上的な意味で言えば極めて知性に富んでいるのですが、霊的進化という点では全く未熟な霊達なのです。そうした者達は、凶悪性があるとか、イタズラが好きというわけではないのですが、間違った偏狭な自分の考えをさも唯一の事実であるかのように思い込み、自分の説を地上に通信したがるのです。



## 幽界の“知的未熟霊”の介入

今述べた知的未熟霊達は、ある程度まで霊的真理に通じています。また地上で宗教思想や神智学を学んだ者ならば、当然再生の事実も認めています。愛にこそ最高の価値があることを理屈として知っています。このように知識としては「霊的真理」を知っているのです。それは考えようによっては、地上のどんな教祖よりも霊的真理を知っているということです。彼らの中には、自分の考えだけが絶対的な真理であるかのように思い込み、それを地上に通信したいと図る者もいます。自分の思想に絶対的な自信を持っているため、何とかそれを他人に教えたいと思うのです。

そうした霊達は、もし地上に自分と相応する人間を見つければ、積極的に通信を送ってくるようになります。ケイシー・リーディングにおいて、ライフ・リーディングへのきっかけを作ったのが「ラマーズ」とよばれる人物であることはよく知られています。神秘的な世界に対する知識を持ち、好奇心も旺盛であったラマーズは、そのような霊達にとって絶好のカモ的存在でした。彼によって、霊的に未熟な研究者霊からの通信網が手引きされることになりました。そしてライフ・リーディングが始まることになりました。（\*次の補足を参照してください。）

ライフ・リーディングでの惑星間輪廻は、まさにこうした“知的低級霊”から送られてきた独断的思想だったのです。あの世から送られてくる通信内容が知的であると、それだけでその通信のすべてが価値のあるもの、高い世界からのものと考えがちですが、実はこうした知的未熟霊・知的低級霊からのものが結構多いのです。ケイシー・リーディングの中にあるそれらの通信は、地上の人間からすれば高度な真理が語られているように映るため、さも価値のあるもののように“錯覚”してしまうのです。

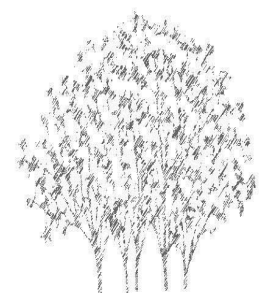
ケイシー・リーディングは惑星の影響力を大きなものとしていますが、これは通信霊が「霊的事実」に無知であること、すなわち“低級霊”であることを示しています。ケイシー・リーディングの中に占星術が入っているということ自体が、低級霊からの通信であることを示しているのです。“占星術”が

人類の魂の進化にとって意義のあるもの、重要な影響力を持っているものであると述べるような高級霊はいません。むしろ物質である星が、霊である人間に及ぼす影響は取るに足りないこととし、占星術に係わることを厳に戒めています。占星術を評価するような高級霊は一人としていないのです。（\*占星術については、すでにニュースレター9号で述べました。）

生（地上生活）と生（地上生活）の間の滞在先は霊界であって、ケイシー・リーディングで言うような惑星霊界ではありません。誰もが生と生の間は霊界に在るのであり、幽界を通過して後は「類魂」の一員として過ごすこととなります。こうした重大な事実について言及していないところから見ても、通信霊はほぼ“地縛霊”に近いことが窺われます。

\*ケイシーを通じての20年にわたるフィジカル・リーディング（医療リーディング）は、彼が46歳の時（1923年）に、アーサー・ラマーズという哲学・比較宗教学の研究者と出会い、転機を迎えたと言われています。ラマーズの質問に促されて、それまでのフィジカル・リーディングにはなかったカルマや輪廻の問題が、テーマとして取り上げられるようになりました。そしてライフ・リーディングという新しいリーディングが付け加わるようになったのです。

これはスピリチュアリズムの観点から見れば、地上人の好奇心に相応して、霊界の知的未熟霊が通信を始めるようになったことに他なりません。従って、霊的な内容としては進歩というべきものではなく、霊界通信の純粋度が薄められたことを意味しています。程度の悪いソースの介入を引き起こしてしまったということです。



## (6) フィジカル・リーディングについて

ケイシーは単なる“霊媒”

ケイシー・リーディングの中で、唯一信頼のおける通信と思われるのが、医療リーディング（フィジカル・リーディング）です。このフィジカル・リーディングは、催眠状態のケイシーが、相手の患部を透視して診断し、特殊な食事療法やマッサージ、医薬品などの指示を出すというものです。トランスから覚めたとき、ケイシーは自分の喋ったことを覚えていません。これは透視をはじめ患者に与えられる指示が、彼自身から出たものではないことを意味しています。（\*サイキックによる透視ではないということです。）

このリーディングの一連のプロセスは、霊界の医師達によって進められたものであり、それをケイシーの口を通じて伝えたのです。つまりケイシーは単なる“霊媒”の役割を果たしたに過ぎません。ケイシー・リーディングによるヒーリングは、驚異的とも思われる高い治癒率を上げ、人々の評判になりました。

治療実績を上げられない後継者達

現在でも、ケイシーのリーディングを忠実に踏襲し、あるいはリーディングを頼りにして治療に応用しようとする人々がいます。いわゆるケイシー・リーディングの継承者ともいべき立場の人々です。今では膨大なフィジカル・リーディングは“ケイシー療法”として整理され応用しやすくなっています。しかし、現在のフィジカル・リーディングの後継者達が、ケイシーの指示どりの方法を試みても、治癒率はケイシーに遠く及びません。このことは、真面目にケイシー・リーディングを実践する者達において、大きな悩みとなっています。

ケイシーの治療に限らず「心霊治療」では、常識では考えられないような驚異的な治癒率を上げています。こうした実績があればこそ、医学界から激しい批判や攻撃がなされても生き延びることができたのです。目覚ましい治癒率こそ、心霊治療における生命線と言ってもよいでしょう。多くの現代人がケ

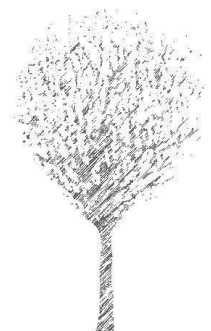
イシーの継承者を目指すのは、彼のリーディングが他の治療に比べて治癒率が高かったからです。ところが現在では、その肝心な治療実績を上げられなくなっているのです。

ケイシー治療の本質は「心霊治療」

現代の後継者達は、どうして“師”であるケイシーと同じような実績を上げられないのでしょうか。実はここに「心霊治療」の本質が隠されているのです。心霊治療は、単に物質的な視点からのみ見てみると、その本質を理解することはできません。霊的な視点から見て、初めて心霊治療の実態は理解されるようになっていきます。「心霊治療」において最も重要なことは、実質的なヒーリング操作が霊界の医者によって進められているということです。主役はいつも霊界の医師達であるということです。

それと同時にもう一つの重要な要素は、病気が治るべき時期がきて初めて治るということです。一定の苦しみの期間を経てカルマが消滅すると、患者は背後霊によって心霊治療師のもとに連れて来られます。治るべき時期のきた人が、霊界の人々によって連れて来られるのです。従って、心霊治療が結果的に高い治癒率を上げることができるのは当然のことです。優れた心霊治療には、例外なくこのような“霊的背景”があります。

心霊治療においては、地上の人間の目には奇跡と映ることも、すべて「霊的法則」に基づいてなされています。霊的摂理を外れた治療は存在しません。霊的法則を無視した奇跡は、神の造られた世界には存在しません。ケイシーの治療においても状況は全く同じです。実際には奇跡は一度も生じていなかったのです。





こうした事情を考えてみると、現代の後継者達が、単にケイシーと同じ治療法をしたとしても、高い治癒率を上げられないのは当然のことです。大半のケイシー後継者は、心霊治療についての最大の法則を全く知らないところで、ただ外見だけを真似ているに過ぎません。肝心の霊界の応援のないところでは、心霊治療の実績は上げられないようになっているのです。

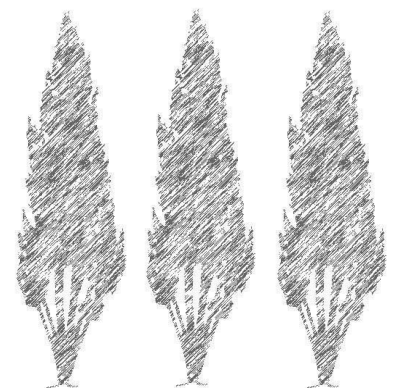
ケイシーは、治療には直接的な係わりを持ってはいません。ケイシーは単なる「霊の道具」に過ぎません。霊界の医師達が患者の治療法を考え、それをケイシーを通じて地上人に伝えていたのです。現在の「心霊治療」では、霊界の医師達が地上のヒーラーの身体を介して、治療エネルギーを患者に注ぐという方式を取っています。ケイシーの背後にいた霊界の医師達は、彼を通じて患者に治療法を教えました。今では霊界の医師達が地上のヒーラー（霊媒）を通じて治療エネルギーを送り、患者の病気を直接治療するようになっています。

#### 時代遅れになったケイシー治療

ケイシーのリーディング（ヒーリング）では、患者に対する診断・治療法の指示はすべて霊界の医師達がしていました。その際、患者のカルマや霊的身体の質、肉体の質といった要素が残らず考慮され、最も効果的と思われる治療法が指示されたのです。霊界では今でも、こうした医師達による研究が進められています。そのため霊界での医学レベルは、年々進歩向上しています。これは地上の医学が、30年前と現在では全く違うことと同じです。従ってケイシーの時代の治療法は、現在では霊界でも時代遅れとなっています。さらに考慮すべき点は、ケイシーのリーディングによる指示は、当時の人々に向けてなされたものであるということです。その時代のアメリカ人と現代のアメリカ人とでは、生活スタイルや環境・食生活が異なり、それに応じて肉体の質が変化しています。一般的には、当時の人々よりも現代人の肉体は悪化・劣化しています。この点からも、ケイシーの指示が現代人には向かないことは明らかなのです。

以上述べたような「心霊治療」の本質を理解しないところで、ケイシーのリーディングを上辺だけ真似たとしても、高い治癒率を上げられるはずはありません。その努力の多くが無駄になります。たとえケイシー信奉者が現在でも高い治癒率を上げていると主張しても、それが苦しい弁明であることは現実の実績が示しています。治療法だけに限って見るならば、現在では他にはるかに優れた方法があります。そうした状況を客観的に観察した現代ホリスティック医学の権威「アンドルー・ワイル」は、ケイシー現象は彼の死とともに終わったのだと断言しています。実に適切で的を得た指摘です。

ケイシー・リーディングの中で、唯一信頼のおけるものは医療リーディングですが、それもケイシー存命中にのみ意義があったということです。それはケイシー・リーディングそのものが、単なる人助け・病気治しを目的として興されたものではないからです。死後にも生命があり、カルマがあるということを入念に人々に教え、スピリチュアリズムの到来に備えて受け皿をつくるために始められたものだからです。ケイシーの医療リーディングは、ホリスティック医学が目される時代を迎え、先駆者としての新たな評価を得ようとしています。本質はもっと別のところにあったのです。



## (7) ケイシーのリーディングについてのまとめ

以上、ケイシーのリーディングを、スピリチュアリズムの観点から検討してきました。彼のリーディングが人々に注目された理由として、次の3点があげられます。

1万4千件にも及ぶリーディングが、文字として残されてきたこと

輪廻転生・カルマの法則、アトランティス古代大陸、天変地異の予言、アーカシックレコードといった話題性のあるテーマが多く登場したこと

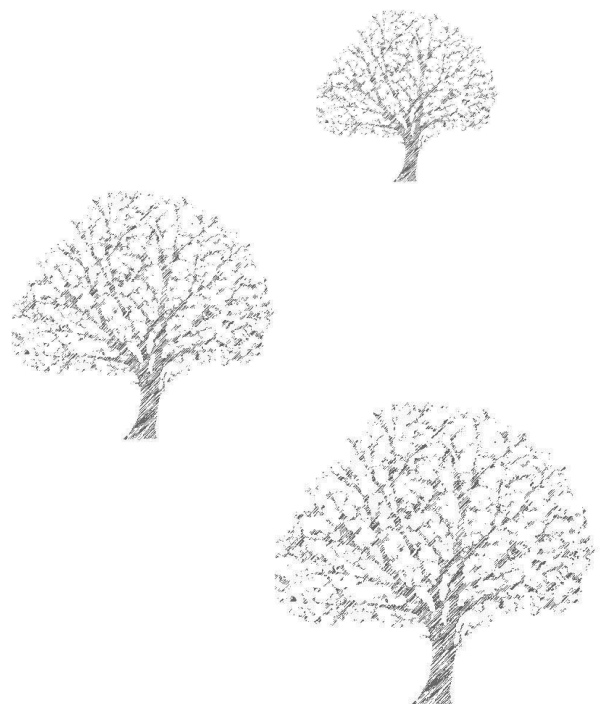
医療リーディングにおいて、驚異的・奇跡的なヒーリング実績を上げたこと

しかしこれらは、どこまでも地上人にとっての興味・好奇心に訴える要素があったということであって、「霊界通信」としてのレベルの高さを示すものではありません。むしろ霊界通信として見たとき、ケイシーのリーディングには極めて多くの不純物が含まれています。上質な霊界通信とはとても言えません。リーディングについては、その内容を厳しくチェックする必要がありますが、ケイシーのリーディングには、あまりにも“低級霊”からの通信と思われるものが多いのです。どれがまともなソースからの通信であり、どれが低級霊からのものなのかという、厳格な区別をしなければなりません。

しかし、ケイシーのリーディングの内容を地上人の立場から分析することは、ほとんど不可能に等しいのが実情です。そのためにはどうしても、信頼のおける「霊的基準」が必要になります。それこそが、スピリチュアリズムによってもたらされた「霊的真理」なのです。スピリチュアリズムを<sup>お</sup>措いて、ケイシーのリーディングを上から見るができる物差しはありません。通信内容を判別する鑑識眼がなければ、低級霊や未熟霊からの通信を好意的に受け入れることになってしまいます。内容が理論的であることや分量が多いことが、質の高さを決定するものではありません。

初めに述べたように、ケイシーには、スピリチュアリズムの計画の中での使命が与えられていました。それは当時のアメリカ人に、キリスト教にはなかった「霊的真理」を示すことによって、スピリチュアリズムの道を準備することでした。確かにケイシーのリーディングには低級霊の介入による多くの間違いがあり、そして、それらが実際に人々に混乱を与えてきました。しかしそれとは別に、高級霊によって大きな目的に向けての計画は着々と進められてきました。スピリチュアリズムの準備をするという大目標を優先する中で、計画は進展してきたのです。

ケイシーのリーディングのお蔭で、アメリカにおいて再生やカルマについての意識が広められました。心霊治療がサタンの業として見られることも少なくなりました。こうして彼のリーディングは、現在の“ニューエイジ”並びに“ホリスティック医学”に先鞭をつけることになりました。ケイシーのリーディングの真価はニューエイジに引き継がれ、やがて近い将来、「スピリチュアリズム」の中に吸収されることになるでしょう。



## 釈迦(シャカ)は今？

霊界通信では、たびたび「イエス」について語られます。ニューズレター8号では、そうした霊界通信によって明らかにされた、霊界でのイエスの様子について述べました。さて、地上の三大宗教の創始者としてイエスと並び称されるのが「釈迦」(シャカ)です。大半の日本人にとっては、シャカはイエスより身近な存在と言えます。ところが高級霊界通信の中で、シャカについて語られることはほとんどありません。一方、最近の新新宗教では、シャカの再生者を名乗る教祖が登場したり、シャカからの霊界通信を受信するといったことが行われています。私達のサークルにも、「今、シャカは霊界でどのような位置にあり、何をしているのでしょうか」「スピリチュアリズムでは、シャカをどのように考えたらよいのでしょうか」といった質問が寄せられています。

シャカが地上に誕生してからほぼ2500年がたちました。その間、シャカが生前説いた教えは、多くの学者や宗教家によって研究されてきました。ここでは「霊的事実」という観点から、シャカの実際の姿に迫ってみたいと思います。スピリチュアリズムでなければ知ることができない、シャカの実像を見ていきたいと思います。

### イエスとシャカの違い

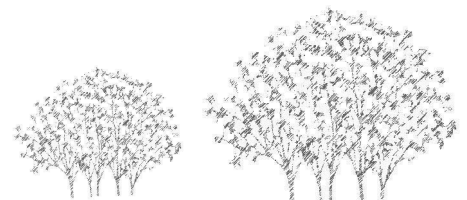
シャカについて質問する人々の多くが、シャカをイエスと並ぶ聖人として位置付けしています。仏教徒にとって、シャカは悟りを得た地上最高レベルの人物(覚者)<sup>かくしや</sup>であり、歴史的に傑出した人物ということになります。時には、私達普通の人間を寄せ付けないほどの超能力者として考えられることもあります。イエスも立派であったかも知れないが、シャカもそれに劣らず立派な人物であったと思っています。

しかし結論を言えば、そうした評価はすべて地上サイドのものであって、必ずしも真実を言い表してはいません。このような問題の真の回答は、「霊的

事実」および「霊的真理」の観点からなされなければなりません。霊的視点に立ってイエスとシャカを比べてみると、この二人の聖人の間には、極めて大きな違いがあるのです。

第一に、イエスとシャカでは、その霊的背景において著しい隔たりがあります。イエスの霊的背景についてはすでにニューズレターで述べましたが、イエスは特別な使命のもとに地上に誕生した高級天使でした。イエスは神格的霊性を持ちながら、地上人として生まれました。こうした高級天使が地上人として受肉するようなことはめったにないことですが、イエスの地上降臨は、その稀なケースの中でもさらに特別なケース、人類史上、空前絶後の奇跡とも言うべき出来事でした。イエスにはこのような極めて重大な霊的背景があったのです。イエスの「霊格」は人類史上、無条件に傑出したものでした。そうしたイエスを天に属する人間とするならば、シャカは地に属する人間ということになります。

第二に、霊能力においても、イエスはシャカを始めとする他の聖人の追隨を許さない立場に立っていました。イエスは地上にありながら、霊界の天使や霊界人と自由に交わることができました。イエスほど霊界の事実精通した人物は存在しません。一方、シャカの霊能力は普通一般の地上人と大差がなく、イエスと比べ明らかに劣っています。シャカはイエスのように、霊界の存在を明確に知ることはできませんでした。死後の世界の問題は地上の人間にとって最大の関心事ですが、その重要な問題について、シャカは明確な回答を示すことができなかったのです。





第三に、イエスは一度かぎりの地上人生を送り、死後はそのまま高級霊界に直行しました。イエスは初めから、地上世界での霊的成長のプロセスを必要としない「霊格」を備えていました。それに対し、シャカは死後、何度か地上への再生のプロセスを踏まなければなりません。シャカは私達と同様、霊的成長のために幾度かの地上人生を繰り返さなければならなかったのです。古代インドの輪廻転生思想によれば、人間が一定の霊的成長をなしたときには輪廻のサイクルから脱け出し、二度と地上に生まれ変わることはなくなります。「覚者」とは輪廻のサイクルを脱した高貴な人間のことです。その意味からすれば、イエスはまさに初めから覚者であり、一方シャカは覚者のレベルには至っていなかったということになります。地上時代のシャカは、自ら悟りを得て覚者になったと思っていたようですが、実はそれは“錯覚”であったということになります。再生の観点から見たとき、イエスとシャカの違いは明らかです。

以上、イエスとシャカを比較してきましたが、こうした点から判断すると、イエスとシャカの霊格・霊的レベルは天と地ほどの開きがあったことが分かります。仏教徒がシャカをイエスと同列において考えるのは、彼らに霊的視点がないためであり、ただ彼らの希望を言っているに過ぎないということです。それは霊界の事実から出たものではなく、単なる地上的な判断に過ぎないということなのです。

地上時代の「シャカ」という人物は、霊界には存在しない

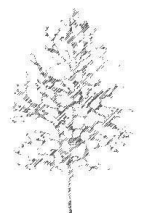
「シャカは今、何をしているのか」と考えるとき、皆さんがそこに思い描いているシャカとは、2500年前にインドに生まれ、修行の末に悟りを開いたと言われる一人の聖人のことです。おそらくは仏教絵画や仏像によってイメージされるシャカを思い浮かべておられることでしょう。しかし、皆さんが考えるそうした「シャカ」という人物は、霊界のどこにも存在しません。シャカと名乗った2500年前の一人のインド人は、霊界のどこを探してもいません。仏典を通じて知ることができるシャカは、地上人の

イメージと仏典の中にしか存在しないのです。現代人がシャカに思いを巡らすとき、かつてのシャカの幻影と、2500年前に消え去った残像を、事実と“錯覚”しているのです。

すでに度々スピリチュアリズムの「霊的真理」を通して、再生に関する事実を学んできました。再生について理解するためには、インディビジュアリティとパーソナリティの違いを正確に把握することがどうしても必要です。私達地上人は、パーソナリティとしての“地上の人物像”しか見ることはできません。そのため、再生を全てパーソナリティの観点からのみ判断してしまうことになります。地上人の視野からでは、再生現象のごく一部、物質次元に現れた部分しか理解できないのに、それだけを再生の全てであるかのように勘違いしてしまいません。再生について正しく理解するには、霊界人と同じような視点から見なければなりません。

パーソナリティとは、地上世界だけに現れる大我（インディビジュアリティ）の一部分・一側面に過ぎません。霊界にいるシャカを2500年前のインド人として考えるのは、パーソナリティの視点に立った見方です。地上だけのパーソナリティ（人物像）は肉体の死とともに消滅するのです。霊界においてシャカは今、2500年前にその一部をインドでシャカとして顕現させたことのある「霊」として存在しています。その霊こそが、シャカの「大我・本体霊」なのです。その霊にとって、かつてのシャカとしての地上的人格は、<sup>ざんし</sup>残滓のようなものに過ぎません。地上時代のシャカ像とは、以前着ていた衣服のようなものなのです。

皆さんが将来霊界に赴いたとき、もし一定の霊格を持っているならば、昔「シャカ」として地上世界に一側面を現したことのある「霊」と合うことができるかも知れません。しかしその霊は、皆さんの思うシャカとは似ても似つかぬ存在なのです。



靈的真理に無知だった地上時代の「シャカ」

シャカが生前に説いた教えは、スピリチュアリズムの「靈的真理」から余りにも大きく懸け離れています。その最たるものが、死後の魂と死後の世界の存在についてです。シャカは常住不変の実体の存在を否定しました。このシャカが否定した不変の実体とは、スピリチュアリズムで言う「靈魂」に他なりません。靈魂の存在は、スピリチュアリズムにおける最も基本的な真理です。生前のシャカは、スピリチュアリズムの基本であり、最重要な真理「靈魂の存在」を否定したのです。このように地上時代のシャカは、根本的な間違いを犯しました。シャカは、自己という実体がない以上、死を恐れる必要はないし、『縁起えんぎの法』を理解することによって死の恐怖にとらわれることはなくなるとしました。こうした道理によって、シャカは死の恐怖や人生の苦しみからの克服を図ったのです。しかし、これはスピリチュアリズムの立場からすれば、単なる屁屁屈きべん・詭弁に過ぎません。

シャカの弟子の中には、シャカに“死生観”についての疑問をぶつけた者もいます。マールクンヤという青年修行者が、次のような質問をしています

「身体と靈魂は一つであるのか、別なのか」「人間は死後も存続するのか、しないのか」シャカはこの質問に対して沈黙を続けます。そこでマールクンヤはシャカに詰め寄り、さらに答えを求めました。シャカはそうしたマールクンヤを厳しく諫め、『毒矢たどの譬え』を説くこととなります。シャカは「現実に苦悩の矢に当たって苦しんでいるのに、世界は常住であるのかどうかと、魂は永遠であるのかどうかなど、おかしい話ではないか。まず毒矢（苦悩）を取り除くこと、すなわち苦悩を解決するのが先決である」と答えます。そしてそのために示した解決方法が『四諦しだいの教え』でした。

こうしたシャカの論法は言うまでもなく、「靈的事実」に対する無知から出たものです。もしシャカに靈界や靈魂を見ることができるといった能力があったなら、このような返答など決してしなかったはずで、マールクンヤがシャカに投げかけた質問こそ、人間として最も率直でまともなものでした。それに対する

シャカの答えや『毒矢の譬え』は、まさに詭弁以外の何物でもありません。シャカの観念的な無我説と輪廻転生観は、明らかに論理矛盾を露呈しています。そして、その矛盾がシャカの死後、唯識学派ゆいしきの弟子達による『アーラヤ識』という難解複雑な形而上学を作り出すことになってしまったのです。シャカが2500年前に犯してしまった間違いは、現代に至るまで影響を残すことになってしまいました。

仏教の教えは、死後直ちにシャカ自身によって捨て去られた

地上時代のシャカは、自分が悟った真理に自信を持っていたようです。しかし死後、靈界に入るやいなや、地上時代に説いた教えがあまりにも偏り、真実から大きく懸け離れていたことを知るようになりました。靈界という事実の前に、地上での考えは根底から覆くつがえされました。その結果、死後数年もしないうちに、かつて説いたほとんど全ての教えを自ら否定することになりました。従って、仏教はシャカ自身によって、すでに2500年前に葬り去られているのです。シャカは同時に、自分が悟りを得て覚者・仏陀となったと思ったことも間違いであったことに気がつきました。そしてシャカは、現在私達が信じているスピリチュアリズムの「靈的真理」と全く同じものを受け入れるようになったのです。シャカは靈界に入り、それほど時間が経たないうちに“スピリチュアリスト”になったのです。

ところが地上の状況は、こうした靈界でのシャカの動きとは全く逆の方向に進んでいってしまいました。シャカ自らがすでに自分の説いた教えを変更しているにもかかわらず、地上の弟子達はそれに固執し、さまざまな解釈を施し、難解なだけで真実ではない教義を作り上げることになりました。そうした外的な努力が、現代に至るまで延々と2000年以上にも渡って続けられてきたのです。何という滑稽なことでしょうか。それは丁度、私達が小学生時代に書いた作文を、当時の同級生が取り出してあれこれと批判・判断するのと同じことなのです。かつて小学生だった自分は、その後何十年かの人生によって考えも視野も大きく変化し、別人のようになっ

ています。それなのに、そんなに昔のことを論じても何の意味もありません。地上の仏教学者や宗教家はそれと全く同じようなことを、いまだにシャカに対して行っているのです。

#### シャカからの霊界通信？

こうした事情を知ってみると、21世紀を迎えようとする現代に、霊媒を通じて「シャカ」と名乗る人物が出てきて、地上時代のシャカと同様なことを語るというのは、明らかにおかしなことです。また霊界通信によって、2500年前にシャカが地上で説いたのと同じような教えが届けられるというのも、決してあり得ないことです。シャカと霊通したとか、シャカが霊界通信で地上時代の教えを説くようなことがあるとするなら、その全てを疑ってかかるべきです。

このように考えると、現代の最新宗教においてしばしば取り上げられる「シャカ」からの通信が、いかにいい加減なものかがお分かりいただけるはずです。地上人が考えるようなシャカという人物は現実には存在しないのに、シャカからの通信と称してメッセージが公表されるのですから……。

稀に地上人の「霊性」が高く、純粋な動機から真実を求めている限りにおいては、シャカ霊の属する“類魂”の別の霊が、シャカの名を語り、地上人に応じることがあります。たとえ地上人が無知であっても、その純粋な動機に照らしてプラスになるとの判断の下で、そうした例外的なことがなされる場合

があります。その際は、シャカからの通信ということであっても、2500年前のシャカ本人ではありません。もしシャカが地上に通信を送ることが許されるとするなら、スピリチュアリズムと同じ「霊的真理」以外のことを語るようなことは、決してありません。「シャカ」が現在、シルバーバーチ同様の“スピリチュアリスト”であることを忘れてはなりません。

#### 一高級霊として、イエスのもとで働く「シャカ霊」

2500年前、シャカとして地上に顕現し仏教を創設することになった一つの霊は、その後、再生のプロセスを経る中で霊格向上の道を行ってきました。その結果、現時点では高級霊の一柱に至っています。さて霊界にいる高級霊で、現在「イエス」を頂点とする地上浄化の大事業に関係を持たない者は一人もおりません。シャカ霊もその例外ではありません。「シャカ霊」は、現在スピリチュアリズムに係わる何らかの使命を与えられ、地上人類救済のために貢献しているはずです。私達がシャカについて語るのを許されるのは、ここまでです。

シャカについて、これ以上のことをあれこれ詮索したり知ろうとする必要はありません。そうした関心は、単なる低俗な好奇心以外の何物でもありません。シルバーバーチが決して地上時代の身元を明かさなかったように、いかに霊界における「シャカ」の立場を詮索しても、正しい答えが得られることはないのです。





# スピリチュアリズム・ライブラリー

スピリチュアリズム・サークル「心の道場」では、スピリチュアリズム精選シリーズとして、下記の本を自費出版しています。

スピリチュアリズム入門（169頁）

- スピリチュアリズムが明かす - 「心霊現象のメカニズム & すばらしい死後の世界」

続スピリチュアリズム入門（256頁）

- 高級霊訓が明かす - 「霊的真理のエッセンス & 霊的成長の道」

スピリチュアリズムの真髄「現象編」（297頁）

『The Mediums' Book』 アラン・カルデック編著 / 近藤千雄 訳

スピリチュアリズムの真髄「思想編」（357頁）

『The Spirits' Book』 アラン・カルデック編著 / 近藤千雄 訳

500に及ぶあの世からの現地報告（437頁）

- エクトプラズムボックスを通じて明らかにされる死の直後の実生活 -

『Life After Death』 ネヴィレ・ランダル著 / 小池 英 訳

マイヤースの通信 - 永遠の大道（全訳）（271頁）

『The Road to Immortality』 G・カミンズ著 / 近藤千雄 訳

マイヤースの通信 - 個人的存在の彼方（全訳）（304頁）

『Beyond Human Personality』 G・カミンズ著 / 近藤千雄 訳

霊訓（完訳・上）『The Spirit Teachings』（225頁）

ステイントン・モーゼス著 / 近藤千雄 訳

霊訓（完訳・下）『The Spirit Teachings』（260頁）

ステイントン・モーゼス著 / 近藤千雄 訳

シルバーバーチは語る（443頁）

『Teachings of Silver Birch』 A.W. オースティン編 / 近藤千雄 訳

現在絶版となっている書籍の復刻予定

シルバーバーチの霊訓（仮題）『A Voice in the Wilderness』

トニー・オーツセン編 / 近藤千雄 訳

シルバーバーチの霊訓（仮題）『The Seed of Truth』

トニー・オーツセン編 / 近藤千雄 訳

シルバーバーチの霊訓（仮題）『The Spirit Speaks』

トニー・オーツセン編 / 近藤千雄 訳

ジャック・ウェバーの霊現象 『The Mediumship of Jack Webber』

ハリー・エドワーズ著 / 近藤千雄 訳

妖精物語 『The Loming of the Fairies』

A・コナン・ドイル著 / 近藤千雄 訳

## 『シルバーバーチは語る』(Teachings of Silver Birch)

### 発刊のお知らせ

待望の『シルバーバーチは語る』(A.W.オースティン編)が、9月に完成いたしました。多くの方々から、「シルバーバーチの霊訓はいつできあがるのでしょうか」とのお問い合わせをいただき、スタッフ一同ピッチを上げて製作に取り組んでまいりましたが、そこは自費出版でボランティアに頼ったこと、予定より大幅に遅れてしまいました。長い間お待たせして申し訳ありませんでした。

今さら言うまでもないことですが、シルバーバーチの霊訓はどれをとっても素晴らしく、すぐに引き込まれてしまいます。今回、当サークルで出版した『シルバーバーチは語る』は取り上げられているテーマが一番多く(23章)、当然その分シルバーバーチの思想を幅広く知ることができます。しかも一つ一つのテーマが、多すぎることもなく適度な分量でまとめられているため、実に理解しやすくなっています。内容的には、すでに他のシルバーバーチの霊訓の中で取り上げられているものが大半ですが、一冊の中に効率よくまとめられているという点で、“シルバーバーチの入門書”として最もふさわしいものと考えています。

## “スピリチュアリズム・ニュースレター”について

このニュースレターは、これまでスピリチュアリズムを通じてご縁のあった方達に、一年間無料でお届けいたしております。皆さんのお知り合いで、お読みにになりたい方がいらっしゃいましたら、お知らせください。直接お送りいたします。バックナンバーをご希望の方もお知らせください。

これをお読みになって、どのような感想をもたれたでしょうか。どうぞお気軽にご意見をお寄せください。このニュースレターは、今後、3カ月に一度発刊する予定です。

なお、ニュースレターの発送については手違いのないように注意いたしておりますが、時期を過ぎてもお手元に届かない場合には、遠慮なくお知らせください。（現在のところ、1、4、7、10月の初旬に発行いたしております。）

